

# お茶うけ 第37話

## 人を導いた手紙

宮大工を育てる『いかるが工舎』を設立した小川三夫は、斑鳩の宮大工西岡常一から貰った数通の手紙を、30年後の今でも大切に保管しています。

(『いかるが工舎』などについては、前回の「宮大工を育てる」を参照のこと)

高校の修学旅行で法隆寺を見学した小川三夫は、こういう寺院を建築する仕事をしたいと、高校を卒業する直前の1966年(昭和41年)2月に、西岡常一を訪ね弟子入りを希望します。しかし当時、仕事が無かった西岡は、弟子を置くことはできないと断ります。やむを得ず小川は、東京の家具屋に就職しますが、そこは鑿(のみ)や鉋(かんな)を使わないので辞めて、長野の仏壇屋に1年間弟子入りし、次いで島根県の日御崎神社の社殿の図面書きを約1年間します。さらに兵庫県酒垂神社の修理事務所で4か月程働きます。そうこうしている中に、西岡棟梁が奈良の法輪寺の三重塔の再建を担当することを知り、小川は手紙で再度弟子入りを願い出て、西岡から来てほしいという返事を貰います。最初に西岡を訪ねたときから、すでに3年の月日が過ぎていました。



小川三夫が大切にしている手紙は、この3年間に西岡が小川に、人生の心構えと身につけるべき技術を説いたものです。一旦は弟子入りを断り、将来とも弟子にできるかどうか分からない高校を卒業したばかりの一青年に対し、親身になって懇切丁寧に書き綴った宮大工西岡常一の真摯な人柄が偲ばれる手紙です。

内容の幾つかを紹介します。

1966年12月の手紙、長野の仏壇屋に弟子入りした小川に宛てて。

ご自分の一生を託す仕事として、先ず第一に仕事にほれ込み、自分自身にほれこみ、周囲の人にほれるように心がけて、一日一日を充実した心持ちで過ごされるように。寺院建築に関する事にて不審のことあらば、小生の知る限りのことはお伝えします。ご遠慮なくお問い合わせ下さい。(『木のいのち木のこころ(地)』P-34より)

さらに時宜に適した内容の手紙を送ります。(順不同、責任筆者)

- 日本千年の文化は、法隆寺の塔、金堂の柱が支え通してきました。宮大工の技術は、日本民族の文化史を実証し、文化財を保存する事業の基礎となる重要なものです。芸術は心の表現であり、人間生活のいつわりのない希望と理想が、物によって表現されたものです。
- つまらないと思われる仕事でも、精進を重ねると他人より優れた技量が身について、自分自身の心の通った作品が生まれます。人間形成の大切な第一歩です。ひたすら技の錬磨に精進されますよう。
- 見る人の心を押し掴んで離さないような名作を心がけて下さい。見る人の胸に何物かを刻みつける作品は、作る人の魂の深淺によって決まります。
- 大学の建築科の通信教育を受けて勉強されるのがよいと思います。立派な宮大工の基礎となる製図並びに規矩術(日本古来の建築技術)を、心の奥に認識し写し取って、立派な技術者となられることを祈ってやみません。

1969年2月の手紙、弟子入りの許可を小川に宛てて。

法輪寺の方は相変わらず小生一人にてやっております。寺の資金が予定通り集まらぬようですが、貴君一人位なら来られても差し支えありません。(関係の方々のお許しあれば、何時でもお出下さい。(『木のいのち木のこころ(地)』P-57より)

前日も書きましたように、小川三夫は西岡常一のただ一人の内弟子として立派に成長し、優れた宮大工の棟梁になり、今度は自分が次の世代を育てるため『いかるが工舎』を設立しました。

最近手紙の代わりに、インターネットなどを経由した電子メッセージの伝達が、ブームの様相を呈していますが、電子メッセージは一定期間後には消去されてしまいます。優れたメッセージは注意して永久保存できる形にしたいものです。

(敬称略)

以上

参考文献:

『木のいのち木のこころ(地)』小川三夫著 聞き書き:塩野米松 草思社刊  
1993年12月15日初版